

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第 64 回
堀潤さんと語る——若者が手当てする日朝の「分断」

日時：2019 年 12 月 6 日（金）17：00～19：00

会場：同志社大学烏丸キャンパス 志高館 110 番教室

主催：同志社大学グローバル・スタディーズ研究科、同志社大学人文科学研究所・第 6 研究会、
KOREA こどもキャンペーン

後援・協力：京都コリア学コンソーシアム、同志社コリア研究センター、日朝学術研究会

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第 64 回目の今回は、元 NHK アナウンサーで、現在は NPO 法人「8bitNews」代表を務める堀潤さんを講師にお招きし、「堀潤さんと語る——若者が手当てする日朝の「分断」と題して、ご講演いただいた。

講演開始前に、主催団体のひとつである「KOREA こどもキャンペーン」（日本国際ボランティアセンター）から、本事業について説明があった。1990 年代に朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）で発生した大規模な自然災害を支援しようと、1996 年 6 月に「NORTH KOREA 水害支援キャンペーン」が設立され、食糧支援が行われた。その後「KOREA こどもキャンペーン」事業を立ち上げ、その一環として、2001 年から現在に至るまで毎年「南北コリアと日本のともだち展」を日本、韓国、北朝鮮などで開催し、韓国、北朝鮮、日本、在日朝鮮人の子どもたちの絵の展示を通して、民間交流を続けている。また 2012 年からは「日朝大学生交流」も実施しているということである。

続いて、「日朝大学生交流」事業に 2018 年から同行している堀潤さんによる講演と、今夏訪朝した学生報告が行われた。

堀潤さんは冒頭、NHK アナウンサー時代と退職後の活動について語られた。堀潤さんのご活動で大切にされているのは「現場主義」と「メディアの発信」の二点に集約される。特に「北朝鮮」に対する日本のメディアの報道に疑問を持たれ、実際に現場に行ってみようという考えから「日朝大学生交流」に同行したという。

まず、平壤で直接交流して撮影した映像（その一部は映画として上映される予定）を会場の方々と鑑賞した。そして映像を見終わった後、堀潤さんは平壤での交流を振り返りながら、北朝鮮の朝鮮対外文化連絡協会（対文協）の日本担当職員との会話が印象的で、日本では「得難い」経験だったと語られた。訪朝する前は「タブー」な話題を話すことができないという先入観を持っていたが、実際には多くの話題を語り合うことができたのだという。最後に、学生たちが継続して対話・交流する価値・意義とは、学生たちが「再会」する場面に凝縮されており、「絶え間ない交流」の現場、「また会いたい」という未来の約束を「共有」したことにあるのだろうと述べられた。

次に、今夏「日朝大学生交流」に参加し、実際に北朝鮮を訪れて平壤の大学生と交流した学生たちの報告も行われた。

ある学生は、小学校の時からクラスに在日朝鮮人の友達がいる、幼い頃から朝鮮半島に関心を持っていた。高校時代に朝鮮半島のことを調べてみようとしたが、韓国については色々と情報が集まってくる一方で、北朝鮮については何も分からなかった。訪朝する前は「何も知らない」状況だったため、日本で報道されているように、「北朝鮮」のイメージは「不気味」な「怖い」ものだったが、大学に入って自分の目で確かめたいと思うようになった。

訪朝後、ルンラ小学校の子どもたちや平壤外国語大学と金日成綜合大学の大学生、宿泊先のホテルの従業員などとの北朝鮮の現地の人びととの交流によって、北朝鮮に対する先入観が少しずつ取り除かれていった。北朝鮮に初めて行って驚いたことが、日本で当たり前にできることが、北朝鮮でも当たり前でできることだった。「知らない」ということは怖いことだと思った。このように、北朝鮮で出会った人たちともう一度「会いたい」と思うようになった。仲良くなった人びとにすぐに会えないという現実がある中で、「会いたい人にいつでも会える世界」を実現したいと思うようになった。

もう一人の学生は、これまで一般の人びとが北朝鮮に行くことができることを知らなかったが、仲の良かった友だちが訪朝したことを報告した SNS 上の動画を見て、実際に北朝鮮の人たちに会ってみたくなったので、「日朝大学生交流」事業に参加するようになったのだという。訪朝前の北朝鮮に対するイメージは「怖い」「危ない」国だと抱いていたが、訪朝後は「友だちがいる」、「人びとの暮らし、日常がある」、「会いたい人がある」、「国交正常化を願う」国と、少しずつイメージに変化が生まれている。

平壤外国語大学の学生との交流を通して、家族、学校生活、休日の過ごし方、恋愛などの話をしながら、日本の大学生とあまり変わらないのではないかと思った。また、現地の学生とのワークショップにおける議論の中で、拉致・ミサイル問題、「慰安婦」問題などの政治や歴史の問題のみならず、共同の歴史教科書や東アジアにおける共同体などのこれからの平和構築の話ができたことが大きな財産だったという。それはまさに、お互いを「知る」ことではなかったかと振り返っていた。最後に、北朝鮮の大学生が「日朝の国交が正常化された世界」、「人びと・大学生同士の交流が盛んな世界」、「パスポートなしで行き来できる世界」を実現したいと述べられたことが印象に残っており、平和を望んでいる北朝鮮の大学生が多くいることを知ってほしいと述べられた。

学生の訪朝報告を受けて、堀潤さんは「知らないということは怖い。対話というのは大事。対話とはお互いを知るコミュニケーション。このような若い世代の交流を大人がどのようにサポートすべきかを考えなければならない。そしてわれわれ大人たちが変わらなければならない」として、国内の世代間の「分断」をどのように「手当て」していくべきかが課題だと述べた。

質疑応答の中で、「訪朝して得られた経験や知識を日本社会でどのように伝えていくべきか」という質問に対して、一人の学生は「自分の身近な人に話してみたら、興味を持ってくれる人が意外にも多かったのもので、まずは友達に話してみることが大事だと思う」と答え、もう一人の学生は「堀さんをはじめとした多くの大人たちの力を利用して、発信していきたい」

と力強く述べていたことが印象的だった。

最後に、本講演の主催団体を代表して、グローバル・スタディーズ研究科の太田修先生が「日朝の学生たちが再会する可能性を、堀潤さんが「手当て」と表現していたことが印象に残った。対話するということを研究の場、教育の場で確保していくことが大切だと思う」と述べて、講演を締めくくった。

(文責：西村直登)